



Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa
 JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
 www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2022.07.01

あわれみかぶれるこの身なり

鈴木大拙館館長 木村 宣彰

一年間新型コロナウイルスのために皆さんにお会いできませんでしたが、今皆さんの顔を拜見出来て大変喜んでおります。

今日、浄光寺様へ寄せて頂く途中、周りの植物を見ておりましたら花が咲いておりました。私の所は屋根雪ですけれども、まだ雪があります。その屋根雪をどかしたら、その雪の下からシャクナゲの蕾があった。雪の中で蕾がもう春を待っているんですよ。私はそれを見た時に何とも言えない感動を覚ええました。私は今大拙館でお世話になっ

ているのですが、大拙館の裏の本多の森という所に雪割草が咲いてた。これがまた可憐な花で。

中国の唐の詩人で劉希夷という人がいるのですが、その彼の詩の中に「年年歳歳花相似／歳歳年年人不同」と。「年年歳歳」というのは、毎年毎年です。「花相似たり」とは、花は毎年同じ花を咲かせているわけですから花は相似たる。「歳歳年年人不同」、毎年毎年、浄光寺さんに寄せて頂いてますが、人同じからず。先ほどご住職さんと

「お変わりありませんね」とご挨拶させていただいたけれども、とは言ってもちゃんと数か月で我々の体内の組織は入れ替わっている。でもシャクナゲの花は去年のシャクナゲの花と同じ花を咲かせて、相似たり。私も十七年前はこんなに髪も白くなくて、だんだんと歳相応になつてきている。人、同じからず。

そういう事を思うとやっぱり自然というのは大変素晴らしいものだと教えられるですね。人間はやっぱり歳を取る。それはそれでいいのですが、自然を眺める度にもっともつと自然に接していく事が大事だなと思います。

世間虚仮唯仏是真

先ほど坊守さんとお話をしていたのですが、私はもう半世紀ほど前から大谷大学でお世話になつていて、当寺の学長さんが曾我量深という学長さんだったので、「本学は世間で役立たない人間をつくるのだ」とおっしゃって、私は世間で

役立たない学校に来たのか、なら帰ろうかと思つたものです。それからずっとこの事を考えていたのですが、やっぱり世間というものに合わせないで自分の生き方というものをきちんと守つていこうということをおっしゃっていただと思うのです。

聖徳太子のお言葉の中に「世間虚仮唯仏是真」というのがありますね。このお言葉は、法隆寺の玉虫の厨子に書かれている「諸行無常／是生滅法／生滅滅已／寂滅為樂」という事。

お釈迦様がヒマラヤの山の中で修行していると、どこからともなく「諸行無常」「是生滅法」、諸行は無常でいつまでも同じではないですよ、変化するものですよと、声が聞こえてきた。これだけでは文章が成り立たないからこの続きが何かあるはずだと思つたけれど、周りに人はいない。そうしたら鬼がいたわけです。羅刹がいたので「お前がこれを言つたのか？」と尋ねた。もししたら、「そうだ」と。それならば

「その続きがあるだろう。それを教えてくれ」と言ったら、その鬼は、「私はお腹が減って何も喋ることができない」と言うわけです。では「何か食べ物を探してくるからどうしてもその続きを教えてください」と。

すると鬼は、「私の食べ物といっても温かい肉と血なんだ」と。要するに生きた人間を食うという訳ですよ。コンビニやどっかそこらで食べ物を買ってくるわけにはいかないから、それでは「私を提供するから食べてくれ」と。でもそれはこの尊いこの言葉の続きを聞いた上でないとダメだと。聞いたら必ず私はお前にこれをやる。自分の身体を施してその言葉を聞く。これを施身聞偈せしんもんげという。

そうしたら鬼は「生滅滅已」「寂滅為樂」と唱えた。早速、雪山童子（お釈迦様の前生）というのがこれを書いた。あっちにもこっちにも書いた。私だけ聞いたのでは役に立たない。みんなに、後の人に伝えなければならぬ。そうして残したのは「諸行無常」「是正滅法」「生滅滅已」「寂滅為樂」。「さあ約束通り食べてくれ」

と飛び込んだら、本当は鬼ではなくて帝釈天だった、それで体を救ってくれた。その事が聖徳太子様の法隆寺の玉蟲の厨子に書いてある。漢字だと難しいからそれをわかりやすく日本語に直したのが皆さんよくご存知のいろは歌ですよ。「いろはにはほへと、ちりぬるを、わかよたれそ、つねならむ、うぬのおくやまけふこえて、あさきゆめみし、ゑひもせすん」。

諸行はいつまでも変わらないものはない、これが生まれたらそれは滅ぶ、そういう存在。「いろはにはほへとちりぬるを」、散るんですよ。桜が満開で綺麗だなど思っても、一時の事でみんな散りますよ。それはちようど夢を見ているようなものだ。酔っぱらっているようなものだ。その酔っ払いから覚めなきゃだめだ。それが寂滅為樂。花が咲いたと喜んでいられるだけではなく、本当に正しい変わらぬものを掴む、それが大事だ。おそらく聖徳太子様が「世間虚仮唯仏是真」とおっしゃったのは、こちらの句をぐっと縮めて世間はみんな移り変わるものですよ、ただ仏様の世界だけは真実です

と。それをずっとおっしゃっていたから太子が亡くなった後、その奥様（橘大郎女）がこれは残さなければいけないと、推古天皇の許可を得て中宮寺の天寿国曼荼羅帳てんじゆこくまんぢらじやうに刺繍にして残された。娑婆はみんな移り変わりますよ、でも仏様の世界は変わらないですよ、という事を残していたのだいたわけです。「うぬのおくやまの、「有為」というのは移り変わるものですよ、条件によって移り変わるものですよ、絶対に安全という事ではないですよ、やっぱり条件が変われば事故が起こったりする、そういう存在を有為法という。

有為法

何故このような事を申し上げたかたといいますと、3月11日の東日本大震災でたくさん津波、あるいは原発の事故が起きましたが、江戸時代の慰霊塔の中に書いてある言葉を見てね、いたくびつくり仰天した。一切有為法を供養するためにこの慰霊塔を立てた。通常亡くなったお父

さんやおじいさんやあるいは兄弟など人間の為に供養塔が建っている。しかし、その慰霊塔は一切有為法。一切有為法というのは人間はもちろんですが、動物や植物などの生き物だけではなく、こちらの机も立派けれども千年も二千年ももつとは限らないですよ。そういう一切のものを供養していく。江戸時代の中期的くらい、300年程前の供養塔だったのだけど、そういうものを建てた人は全部が繋がっているとされている。私だけでなくてみんながこの関係の中で生かされていると思ってるから、一切有為法の為に供養する、と書いてある。これこそ仏法の世界だな、と私は感心したのです。でもそういう事をみんな忘れておる。

二十年ほど前かな、インドの先のセイロンという所にあるお寺にお参りに行ったんですよ、そして靴を脱ぎましようとして、裸足になってお寺の参道を歩くのです。玉砂利の上を。今、浄光寺さんに入ってきたときは靴を履いていましたけど、あちらのお寺では門の所でもう脱ぐんです

よ。熱いゴロゴロの石の上を素足であるくと足の裏から大地というものを感ずる。

私は鈴木大拙館に靴を履いて車に乗って行く。大地を忘れてしまつて、アクセルを踏めば進む、ブレーキを踏めば止まる、自分の思うように全てが出来ると思つてしまうのだけど、そういうものではなくてみんなが関わり合つて生きている。一つだけで、私だけで生きられるというのは絶対にないですね。

この供養塔の中に一切有為法の為に供養すると書いてある。それは机も家も車も靴も、犬も猫も石も砂利も全部、これ一緒に供養する。自分と無関係ではなくてそれと共に生きている。我々は何かを考えるとき原因を考える、原因は一つではない、みんなそういう因縁に関わつていますね。

樹木希林が大切にした言葉

私は鈴木大拙館にいますけど、と

でも有難いと思つているのは、大拙先生と声なき声で対話できるわけですよ。毎日毎日、大拙先生はどう思われるかと。大拙先生はですね、昭和21年、戦争が終わつてまだ一年も経つていないとき、天皇后陛下の前で仏教とは何かというご講義をなさつた。仏教の大意という講義をなさつたのですけど、その最後の所に何が書かれていたかというところ、妙好人のことがずっと書かれていた。娑婆つていうものは事事無碍じじむわい、ありとあらゆるものが関わり合つていく。宇宙というのはみんなが関わり合つて生きているのですよ、ということをお話なさつた。

樹木希林さんは100冊しか本を持たないそうです。101冊目を買った前分を処分して、いつも自分の手元にあるのは100冊に限つています。そしてその本の中で、世間虚仮じゃなくて唯仏是真のよう、これこそが真だ、自分の拠り所だという所に赤い線を引いてあるんです。100冊の本の中に鈴木大拙先生の『仏教の大意』という本がある。

これはさきほどの天皇后陛下のために講義された内容ですけど、赤い鉛筆が引いてある。どこに引いてあつたかというところ、「死ぬときに死にます、生まれるときに生まれます。生まれたい喜ばず、死んで悲しまず、晏然あんぜんとしています」。晏然、心が乱れることはなく安らかとしています。それ故、何の理屈も言わず、そのまま何もかも受け入れています。これが無分別の分別。分別の無分別という即非の論理を生活そのものの上に活かしたものだ。「生まれて喜ばず、死んで悲しまず」、要するに生滅滅已、生まれたい良かつた、亡くなつたらダメだ、宝くじ当たつたら良かつた、当たらないかつたら悲しい、そんなことに迷わない。あさい夢を見ないで、寂滅為樂の世界。それを書いてある。樹木希林さんというのはそこに線を引いて、そしてそれを拠り所にして生きておられたのですね。何年か前に亡くなられたと思えますけど、大変な人だなと。

二つの世界

この本の中でどういう事が問題になつていくかというところ、私達の生きていく世界は生まれたり滅んだり、良かつたな、悪かつたなと思うことを繰り返している世界と、もう一つそうじゃない世界がありますよ。大拙先生のお言葉でいうとそれは知性、感性の世界、ああ花が咲き綺麗だなと喜んでいく世界と、そういうものを超えた靈性の世界。靈性動かないで、寂滅為樂というか物の道理に従つて生きている、そういう世界。心の奥から湧き上がってくる、妙好人のように宗教観というか、直感で物事を捉える。おそらく樹木希林さんもそこに近いところにおられる。私などは、頭で考えてこれは大きいとか小さいとか、これは上手いとか悪いとか分別して生きていますけど、そういう分別を超えた世界とそれを超えたもう一つの二つの世界があるとつています。

それを親鸞聖人のお言葉でいえば存知の世界、もう一つは信知の世界。「これは何かご存知でしょうか?はい知っています。これは何ですか?」

はい、これはネットで調べたら答えが出てきました」、この世界が存知の世界。ネットの世界は見える世界と聞こえる世界だけですよ。私には高齢の母がいますけれど、母の手を触ると安心したような顔していますよ。あるいは幼い時、母親が料理を作っていると、どこからともなく味噌汁の匂いがふうつとすると、もう食事だなと喜びを感じる。でもそういう事はネットでは伝えることは出来ないわけです。触れるとか味わうとかそういうことは人間の最も根本的な世界だと思ふけれど、それはオンラインでは難しい。でも知識の世界、耳で聞く世界、あるいは目で見る世界ではとても便利な世界です。

先ほど控室で教えて頂いたのです、良いに悪いは付いているものですよ。大拙先生も二つであつて一つ、一つであつて二つとずっと言っている。そういう見える世界と見えない世界。親鸞の言葉でいえば知識で分かる世界と知識ではどうにもわからない不可思議な世界とがありますよ。それを大拙先生は霊性の世界と知性の世界とおっしゃった。

皆さんもよくご存知の蓮如上人という方がいらつしやいますよね。蓮如上人の『御文』の中にこう書いてある。「それ、八万の法蔵をしるというとも、後世をしらざる人を愚者とす」。文章で書かれていますから難しくても見ることはできる。読むことも出来る。これは存知の世界です。でも後世を知らざるものは愚者だと言われても、後世を見ることもできませんければ触れることもできない。それはやっぱり親鸞聖人のいう信知の世界だし、大拙先生のいう霊性の世界。



そういう世界が二つであつて一つ、一つであつて二つの世界に私達は生きていくんだけど、片方だけにいるとそういうことがよく見えなくなりますよ、ということを親鸞聖人も蓮如上人も、あるいは大拙先生も、また聖徳太子様もその事を私達に教えて頂いているわけです。

衆生無辺誓願度

先ほど控え室でお話していたのですが、大拙先生は明治三年（1870年）の生まれですよ。アメリカに渡られたのですが、アメリカで就職して給料をたくさん貰っている、それは違います。今で言うフリーターのようなものです。だからその中で大拙先生は悩みます。自分は何のために生きていくのか？ どう生きるのか？ ちょうど21世紀が始まった30歳の時に、ぐっと掴んだ。「衆生無辺誓願度」、一切衆生の為に生きていくのだと。自分が勉強するのも、あるいは働くのも全部衆生の為だ。私が大学に入った時に曾我量深

先生に世間に役立たない、きちんとした生き方を掴む人間になれ、とおっしゃって頂いた。そういうものを掴んで生きるのか？ そうでないのか？ 大きく違ってくる。大拙は3歳の時にそれがわかった。仏法の中に四つの誓い、四弘誓願というものがあつて、一番目が「衆生無辺誓願度」、全ての人々を救う。二番目は「煩惱無量誓願断」、煩惱を無くす。三番目は「法門無尽誓願学」、仏法を学ぶ。四番目は「仏道無上誓願成」、悟りをひらく、こう四つ順番に書いてあるんです。でもよく考えたら不思議じゃないですか。最初は自分の煩惱を無くして、仏教の教えを学んで悟りをひらいて、さあ、これから社会の為に働きましょう、人を救いましょう、普通そういうふうにごえます。でも四弘誓願の一番初めに「衆生無辺誓願度」とこう書いてある。それで大拙先生は気づかれたのです。私は今悩んでいる、何のために勉強するのか？ 何のために働くのか？ そう悩まれ考える中で気づかれた。全ての人々との関わりの中で生きていくのだ。もしそんなことな

いなら煩惱を断ずる必要などなく、気にしないで煩惱のままに生きていればいい。でも自分の勉強を一生懸命日々努力する。今日はいいい日だと考えて生きている。全ては一切衆生の為なのだと気が付いたら生き方がすーっと通った。そうしたら今までの生き方とは全く違う方向性が決まった。

ました。そうしたら、さあ社会の為に役立つことをしましょうとなりますが、そうじゃない。何のために勉強するかということを考えて、生きとし生けるもの、その為に仏法を学ぶ。だから金沢にお帰りになって野田山のお墓参りして、もしちよつとでもその事を聞いて考えてくれる人がいるならばお話ししようと子供達にお話をされた。

び

先生は歳を取ってからアメリカから帰られた。金沢の野田山のお墓にお参りになった。金沢にいたの

大拙先生の奥さんはベアトリスというアメリカの人ですけど、結婚した時からずっと「衆生無辺誓願度」

く さ む す び
自分の母校の小学校に行つて「みんな頑張つて」と小学生に講演して、また別の所でも三回講演なさつて、子供達を激励してお帰りになった。みんな衆生無辺誓願度。日本人もいればアメリカの人やフランスの人やロシアの人もある、生きとし生けるものは限らない。それを誓つて、願つて、救いたい。衆生無辺誓願度、その為に私は日々努力するんだとおっしゃっているんですよ。普通なら仏法を学びました、勉強して大学を出

です。素晴らしいじゃないですか。仏法の素晴らしさ、東洋の素晴らしさを西洋の人達に伝えることが私とあなたの使命ではないですか。それが衆生無辺誓願度の願い。

西洋は大体二つに分けて考える。神様が人間を作った。神と人間は別々だけど、仏法の考え方は仏様も昔は凡夫であつたと。お釈迦さまも凡夫だつたのだけど悟りをひらかれて教えを説いていかれた。「西洋との違いを伝えるのが私達二人の使命

ではないですか？でもなかなか私達の約束事を実行できませんね」と、奥さんが生前ほとんど毎日口癖の様にその事を私に言っていたと先生はおっしゃっていた。京都においでになつて、大谷大学の教員になつて、それからすぐに英語で仏法を伝える、『イースタン・ブデイス』を創刊し、英語で奥さんと二人で一緒に書いて西洋に送り続けた。東洋の考え方、仏法はこういうものですよと。

30歳の時に気づいて、35歳位の時にベアトリスさんと約束したことが、ずっと96年8カ月の生涯まで変わることなく、色んな事があつても私はここへ向かつているというところが一貫しているのです。煩惱を無くして、仏法を勉強して、悟りをひ

らいて、さあこれから世間に働きましょう。でもそうじゃなくて、世間に働く為に煩惱を無くして仏法を勉強していかれた。それだからこそあれだけのお仕事が出来たのだろうと思います。

聖徳

今年は聖徳太子様が亡くなつてから1400年ですよ。聖徳太子様は推古30年2月22日に亡くなりました。西暦でいうと、622年でしょう。今年は2021年ですから正に1400年に当たるから各地で御遠忌を予定しておられる。法隆寺の金堂にお釈迦様の仏像がありますね。その裏に光背に由来が書いてある。そこに聖徳太子様の亡くなつた日のことがちゃんと書かれている。前の年の推古29年の12月に祖母さんが亡くなつて、そして翌年1月に聖徳太子様が病氣にかつた。2月21日に聖徳太子様のお姫様(膳部善岐々美郎女)も亡くなられた。要するに聖徳太子のお母さんの看病をしておられた奥さんが2月21日に亡くなる。さらに聖徳太子様が2月22日に亡くなる。3カ月の間に、お母さんと奥さんと太子、みんな亡くなつた。新型コロナではないと思ふけど、そういう感染症ではないかと推測します。だから太子のお墓は

作れなかつたものですから、お母様のお墓を用意していたので太子も奥さんも一緒にそこへ納骨した。お母様の棺が一番奥に横たわって、太子と奥さんが縦に二つ並んで、三人の遺骨が一緒に入っているから三骨一廟と言われるようになりました。本当はお一人、お一人のお墓を用意しなければならぬのでしようけど、急な事で出来なかつたものだからそう呼んだ。

そのお太子様というのはどういふ方かと言うと、世間では聖徳太子の本が沢山でいますけど、その中で

聖徳太子様はいらっしゃらなかつたのではないかとか色んなこと書かれています。でもね、聖徳太子の「聖」と言う字は、あれは『十七条憲法』の第十四条に賢い人というのは五百年に一回だ、聖人は千年に一度だと書いてある。千年に一度出るような尊いお方が聖。聖徳太子の聖。

さらに『冠位十二階』の一番上が徳です。その後、仁、礼、信、義、智、それが大小に分かれて十二になっている訳でしょう。だから『冠位十二

階』の一番上の「徳」と、『十七条憲法』の第十四条に出てくる「聖」、おそらくそれらを合わせて「聖徳」と言う名前を作った。それは聖徳太子が亡くなってから、百年位経っている。だから聖徳太子様は自分が聖徳と呼ばれていることはご存知ないのですよ。また親鸞聖人は見真大師と呼ばれていますが、後世の人達が自分の事を見真大師と言っているのはご存知ない。だから聖徳太子がいなかつたと議論なさっているけれど、それは後の人が褒めて言っている。

私はそういう事を研究することも大事で尊いことだと思っているけれど、『三経義疏』では「法華経」、「勝鬘経」、「維摩経」の注釈をお書きになられた。あの時代にあのような漢文で書かれたものを注釈を出来る人はそうはいらっしゃらない。私はあるところで縁があつて聖徳太子様の『法華義疏』を拜見した。日本で書かれた書物の中で一番古く、1400年前のもですよ。それを読むと、私は聖徳太子様がこれを書か

れたというよりも、こんなに尊い事をお書きになった人が聖徳太子様だと、こう思うんですよ。それは奈良の国立博物館で拜見しましたが、ジーンと来るものがありますね。もとは法隆寺にあつたのですけど、皇室に献上されて御物となつた。ですから明治天皇は自分の御部屋の真横に聖徳太子の『法華義疏』を置いておられた。

どういふ事が書かれているかという、『三経義疏』を読みますとね、お釈迦様の説法がお経ですけど、これはお釈迦様の時代の人達だけを救う為のものではないんですよ。遠く、末代までの人達の為に説かれているのですよ。『法華義疏』にも『勝鬘義疏』にも『維摩義疏』にも同じような事が書かれています。更に『法華義疏』を読むと、万善同帰とある。難しい仏法の言葉を理解するのは大事だけでも、理解することよりも善を行うということが大事だ。それを聖徳太子様は、万善同帰と。良い事を行う。では良い事というのはどういう事か。その中に書いてある。一声の「南無阿弥陀仏」これが一つの善だ。何故

そんなことを言うのかという難しい議論はなくても、それを実行するのが大事なのだ。そう『法華義疏』に書いてある。理屈を分かつてからやると言っても何も出来ない。究極の理屈というものは本当は分からないものかもしれません。

聖徳太子と法然上人のお導き

先ほどのお勤めの中に太子のご和讃があつたでしょう。「正像末和讃」という和讃の最後のところに皇太子聖徳奉讃の和讃が全部で11首あります。その中の一つに「久遠劫よりこの世まで」と、久遠劫といつたら大昔ですよ。聖徳太子様の49年の生涯だけでなくて、そのずっと昔からこの哀れみを被っているんだと。また「和国の有情あはれみて」、「多生曠劫この世まで／あはれみかぶれるこの身なり」、自分が太子様のはれみも被っているのだと。ずっと昔から自分は四六時中太子様のはれみを被っているのだと。これらの太子和讃は何か他のものを読み替えて書

いたのではなく、本当に聖徳太様の事を憶って、親鸞聖人のお気持ちがい最も伝わってくるご和讃だと思いません。さらに「父の如くおわします」、「母の如くおわします」と両親のように太子様に自分のことを憶っていただいてる、と感謝の言葉を述べているでしょう。

「和国の教主聖徳皇／廣大恩徳謝しがたし／一心に帰命したてまつり／奉讃不退ならしめよ」。聖徳太子のご和讃は先ほど言いましたように「正像末和讃」の最後の所に載っているのですが、これらの和讃は親鸞聖人が85歳の時にお作りになった。一番最初にこう書かれている。

こうげんにさいひひとみにつこゆかのよとらのまき
康元二歳丁巳二月九日夜寅時
夢告ゆめについでいわく云

弥陀の本願信ずべし

本願信ずるひとはみな

撰取不捨の利益にて

無上覚をばさとるなり

この和讃を、夢におおせをかぶりて、うれしさにかきつけまい

らせたるなり

夢を見られたのです。これは理屈の世界ではなく、先ほど大拙先生の言う霊性の世界です。心にピンときたわけです。物を考えて分かったのではない。あるいは親鸞聖人のお言葉で言えば、信知する世界で感じ取られた。だから嬉しさのあまり「この和讃を、夢におおせをかぶりて、うれしさにかきつけまいらせたるなり」と。ではこれは誰か。これは仰せを被りとおっしゃっているのだから法然上人なんです。夢に法然上人が現れて、寅の刻、明け方四時くらいに夢のお告げがあった。内容は本願信じているものはみんな撰取不捨、仏様になれますよ、と。

その後、聖徳太子のご和讃を書かれた。ではなぜ正像末和讃に太子のご和讃があつて、法然上人のご和讃があるのかというと、親鸞聖人は法然上人の仰せを被つて生きて来られた。その法然上人という方は阿弥陀さんの智慧の象徴なのです。だから勢至菩薩の生まれ変わりだと親鸞聖人は思つていらつしやる。阿弥陀様

の智慧を象徴する勢至菩薩が法然上人だ。そして聖徳太子様は何か。慈悲を象徴する観音様の生まれ変わりだ。だから六角堂を出た時から阿弥陀さんの慈悲と智慧を象徴するお二人のことをずっと思つていらつしやる。

親鸞聖人はご和讃の中にこういうご和讃がありますね。

曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いままさずは

このたびむなしくすぎなまし

大昔から因縁を知らないまま本師源空からお導きを得ていたのだ。六角堂の夢のお告げで法然上人に出遇つてから自分の生きる道が決まったとおっしゃっている。夢を見られたこの二月九日は、法然上人や親鸞聖人が念仏を禁止されて流罪にあつた日です。だからこの日に見た夢は法然上人で間違いない。そして正像末和讃を書かれた。同時に自分の生き方を決めて頂いのは救世観音。聖徳太子と一体ですよ。

622年に亡くなった聖徳太子ではないのですよ。ずっと昔から生まれ死んで自分を導いてくださった。「多生曠劫」、長い時間の中で、この現在まで憐み被るこの身。私が憐みを被つて生きてきた。「一心帰命絶えずして／奉讃ひまなくこのむべし」。聖徳太子の奉讃を知らなければならぬ。だからお寺の内陣のこちらに太子様のお姿が安置してある。「多生曠劫この世まで」でしょう。

多生曠劫この世まで

あはれみかぶれるこの身なり

一心帰命たえずして

奉讃ひまなくこのむべし

「曠劫多生のあいだにも／出離の強縁しらざりき」、長い間私は迷ってきたのだと、本師源空、つまり法然上人がいらつしやらなければ私の人生は虚しく過ぎてしまった。80歳で亡くなった法然上人、49歳で亡くなった聖徳太子様ですが、ずっと生きて来られて私の所にまでいらしてくれたと親鸞聖人は思っている。これはとても尊いではないですか、信

※「きこまいけ」毎月28日・午後2時～ みんなで「正信偈」のおけいこをしています。お気軽にどうぞ。

じて疑ってらっしゃらない。そしてご和讃を書かれた。これは自分が生きる為の確固たる拠り所になっているのです。法然上人のお導き、聖徳太子様のお導き、それによって親鸞聖人は確固たる生き方が出来た。その喜びですよ。それであれだけ沢山のご和讃を作られた。

「多生曠劫」と書いています。法然上人のご和讃の「曠劫多生」と反対に書いてある。今生のことだけではなくてどれだけの恩を被ってきたか。その事を知らずに生きてきたのか。そのことを84歳の時に気づかれて法然上人が夢に現れて、ああもつたいないとうことで和讃を書かれた。同時に救世観音の生まれ変わりが聖徳太子様。親鸞聖人が固く信じておられる。お二人を自分の拠り所にして生きて来られた。

「十方ひとしくひろむべし」、「奉讃不退ならしめよ」、「慶喜奉讃せしむべし」、これ命令形ですよ、親鸞聖人から私達に命令なさっていると思うけども、そうではなくて阿弥陀様から親鸞聖人が受けていらっしゃる気持ちも書いています。親鸞聖人は、弟

子一人も持たないというのですから命令するはずがない。観音勢至を通して、奉讃を忘れちゃいけませんよ、尊い人ですよということを書いていらつしやると私は思います。しかし、御開山親鸞聖人が私達に奉讃しなさいよとおっしゃってくださると受け取ることもこれまた尊いことです。

聖徳太子の『十七条憲法』を見てください、私達は何か法律のように思ってしまったますが、憲法の「憲」は「のり」です。憲法の「法」も「のり」です。のりと言うことは法令ではない。人間の歩み、行うべき道をとっているんです。人間というのはこういう風に生きるものですよ、ということをおっしゃっている。だから機会があつたら十七条憲法をご覧になっていただきたい。

憲法の中に罰則規定は一つもない。「和を以て貴しとなす」、和を以て仲良くしなかったらこんな罰則がある、とういうことは書いていない。こういう風に生きてくださいといっているのです、いちいち罰則はない。今コロナの中で自粛しましょう、し

なかつたら罰則、そんなことは違えます。これは人間の生きる道ですよ。だから仏法の「法」というのも「のり」です。憲法も「のり」。だから「法」というのはとても大事です。人間は正にこう生きましよう。そういうものを残していただいた。そういう方が歴史上いたとかいないとか、証拠があるとかないとかそういうことではなく、そういう尊いお方が正に聖徳太子様として私達は奉讃しているわけだし、親鸞聖人もまたずっとお太子様を奉讃している。

親鸞聖人は法然上人がどんな説法をなさったのか、どんな夢をみたのか。全部お調べになられて84歳の時に『西方指南抄』にまとめられた。84歳になってこんな根気のいる、力があるお仕事が出来たのか。自分を導いていただいた法然上人。その法然上人を勢至菩薩の生まれ変わりとして、また聖徳太子様を観音菩薩の生まれ変わりとして奉讃しているという事は、弥陀の本願によって生かされているという感謝の印ではないかと思えます。

今年が1400年、2月22日は旧

暦ですから新暦になおすと4月になりますから色んな所で法要があると思いますが、今日の浄光寺様のお太子さんにお参り頂いて、私の言葉足らずの話ではありますが何か考えて頂いたら今日の法要が意義深いものになるのではと思っております。本日はどうもありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は令和三年三月二十日、浄光寺「お太子さん」の法話録であります。まことに勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

「追弔会」

日・令和四年八月十三日(土)

時・午前十時

法話・細川公英師(順教寺住職)

「きこまいけ」

日時・毎月二十八日午後二時

みんなで『正信偈』に学んでいます。みなさまのご参加をお待ちしております。お気軽にどうぞ。